

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月18日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370052

研究課題名(和文) 『解深密経』におけるツェルパ・テンパンマ両系統のテキスト比較分析

研究課題名(英文) A Tibetan Comparative Textual Analysis of the Samdhinirmocanasutra

研究代表者

加藤 弘二郎 (KATO, Kojiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・特任研究員

研究者番号：90597428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)： 唯識思想の重要な教義が説かれている『解深密経』に関して、「新しい形の校訂対照テキスト」を作成した。まず、本経の諸々のチベット語訳をツェルパ系、テンパンマ系、敦煌写本という3種類に大きく分類し、これらを各章の各段落ごとに、見開き2ページ中に対照的に配置した。これまでのどの校訂テキストよりも理解しやすく、内外の研究者にとっても有益なものとなった。この成果によりいまだサンスクリット原本が失われている本経に関して、今後、よりサンスクリット語の原義に近い形での内容理解が進むものと推測される。

研究成果の概要(英文)： The writing of this study began by constructing a more accurate Tibetan comparative text in the Samdhinirmocanasutra by compiling the many Tibetan manuscripts and editions for the purposes of its comparative analysis. The method employed in constructing this comparative text of Samdhinirmocanasutra was to first divide the sources into three categories: the east recension, the west recension, and the Tun-huang manuscripts. Each line and section of the different categories were then placed side-by-side.

With this, it has become possible to present Samdhinirmocanasutra text in the most comprehensive and useful way.

研究分野：インド仏教

キーワード：解深密経 テンパンマ 校訂テキスト

1. 研究開始当初の背景

本研究で扱う『解深密経』は10章からなり、『般若経』で説かれた空性説に対して新たな解釈を加え、瑜伽行派の主張する唯識説こそがブッダの教説の真意であると示すことを目的とする経典である。本経は同学派の重要な教理が説かれており、その後の仏教思想の発展の原点でもある。それゆえ、本経は唯識思想を研究する上で、非常に重要な資料であると言える。成立はその漢訳年代から、遅くとも4世紀ごろと考えられている。原典はサンスクリット語で著されていたが、現在は一部の断片が伝わるのみで、全体像は中国およびチベットに伝えられた翻訳によってのみ知ることができる。これまで全体に渡る校訂テキストとしては、É.Lamotte 教授による“*Samdhinirmocanasutra*” (Louvain/ Paris, 1935) が出版されているが、これは、チベット語訳の一版本（ナルタン版）にのみ基づくものであり、現代的な視点からは、もはや十分な校訂テキストとは言えない。

2. 研究の目的

このような現状を踏まえ、今回10種類を超えるチベット語訳写本・版本に基づき、新たな形のチベット語訳対照テキストを作成する。

インド大乘仏教の一派である瑜伽行派の依拠する経典『解深密経』を対象とし、東西2系統のチベット語訳テキストおよび4種類の漢訳を用いた校訂・対照テキストを作成すること、すなわち、これまでかえりみられることのなかった西系統(4種類)のチベット語訳テキストを常に参照しながら校訂し、かつ研究者に有益な東西対照テキストを作成することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本経の対照テキストを作成するには、まず諸々のチベット語訳を①ツェルパ系、②テンパンマ系、③敦煌写本、④撰決択分の諸版本、という4種類に分類し、各章の各段落ごとに、見開き2ページの中に対照的に配置する。

具体的には、Lamotte 教授が用いた、ナルタン版を含むツェルパ系統の6種類のチベット語訳版本(チョネ版・デルゲ版・ラサ版・ジャン版・ナルタン版・北京版)の他、これらとは系統の異なるテンパンマ系統の4種類の写本(ロンドン写本・プタック写本・トクパレス写本・東京写本)を主要なものとして比較検討し、第5章～第8章に関して、両系統の対照テキストを校訂・作成した。

上記の作業を進めるにあたり、1名の研究協力者に、TeXの管理、校訂補助の仕事を依頼した。

4. 研究成果

(1) 主な成果

本研究の性質上、今回部分的に完成した「新しい形式の対照テキスト」そのものが主要な成果である。また、それに付随して、これまで使用されてきたどの校訂テキストよりも格段に理解しやすくなった点も、本研究の有益性を示すものである。いまだサンスクリット原本が失われている本経に関して、よりサンスクリット語の原義に近い形での内容理解が可能となり、また、今後サンスクリット語原本が世に出た場合にも、各系統・各段落に整然と対照させた新テキストは有意味である。

これらツェルパ系、テンパンマ系統の写本・版本を比較するという点に関して、本経にのみ特徴的な事柄として、両系統の伝承が著

しく異なる様相を呈している点があげられる。本来すべての写本・版本を 1 ページの範囲に集めて比較するのが最良であるが、上記の理由により、また、敦煌写本に至っては、チベット文字の表記すら異なるため、どうしても一まとめにはできない。それゆえ、ツェルパ系統に属する諸版本（撰決択分を含む）を見開き 2 ページ中の左ページ上方に配置し、西系統に属するものを右ページ上方に、また敦煌写本を同右ページの下方に配置し、なおかつ、その系統内の異読を分かりやすい形で、それぞれに付した。

(2) 国内外における位置づけ・インパクト

本研究に見られるような校訂テキスト資料を使用し、特にアジア（韓国・中国）において、その啓蒙に努めた。日本のテキストクリティークの源流は、ヨーロッパにある。今回の研究期間においては、中国での発表、および日本で開催された韓国人学生との合同セミナーでの発表を試みたが、両学会において本研究の緻密さ・重要性については理解が得られた。特に上海での学会に参加していたヨーロッパ人研究者には、細かく議論・質疑応答を求められた。これまで、北京版・デルゲ版に代表されるツェルパ系統の版本だけで曖昧にされていた箇所解釈に関して、テンパンマ系統の写本による読みの方が論旨をつかみやすい傾向にあることを、すでに当研究代表者の論文により示したが、この点に関しても海外の研究者による一定の理解が得られた。これまで不可能とされてきた、本経の正確なサンスクリット原文の文意の把握という可能性についても、同様の理解が得られた。

本経は、頻繁にその内容が取り上げられ吟味され、多方面に影響を及ぼしてきたという

事実を考え合わせると、本研究によって作成された新テキストによって今後導き出されるであろう新解釈は、インド唯識思想およびその周辺を研究する海外の研究者にとっても大きな関心事であろう。

(3) 今後の展望

校訂範囲については、当初予定していた 5 章～10 章を完成させること叶わず、5 章～8 章の範囲にとどまった。今回、各系統ごとの写本・版本の異読を分かりやすい形で、見開き 2 ページに収めるという煩雑な作業には、既存のアプリケーションでは対応できず、TeX という組版ソフトを使用した。今回のテキスト作成においては、特殊なマクロを作成する必要があり、それら TeX の習熟に想像以上の時間を要した。作業を通して常に、組版に関する技術的な壁が立ちはだかったが、完成したテキストは参照のしやすさという点で、一般のワープロソフトとは比較にならないほどの仕上がりとなった。今回のひな型を利用し、今後、本経の残された章についても同様にテキスト作成を継続したい。

新校訂対照テキストのひな型が完成したことにより、サンスクリット原語とそれに当てられたチベット語訳との比較が容易になり、各写本・版本間の、あるいは各系統間に見られる翻訳上の癖や特徴が明らかになる点、あるいは本経同様、サンスクリット語原典を失っている別のテキストの研究にも活用できる点は特筆すべき事柄である。

今回、新たに扱ったテンパンマ系統の写本はおそらく、形の上からも内容の上からも、ツェルパ系統よりも古い時代の、より明確な訳文を伝承していると推測されるが、この点に関しては今後の課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 加藤 弘二郎、仏教で語られる識説、国士館哲学 22、査読無、2018、18-26.
- ② 加藤 弘二郎、A Textual Analysis of the Description of the “Four Types of Sentient Beings”, Journal of Indian and Buddhist Studies 64, 査読有、2016、169-174.

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 加藤 弘二郎、「こころ」をめぐって—インド思想、フランス思想、日本思想の立場から、国士館大学倫理学コースシンポジウム、於 国士館大学（世田谷区）、2017年12月16日.
- ② 加藤 弘二郎、『解深密経』における漢訳文献の重要性について、東京大学・金剛大講堂合同学術セミナー、於 東京大学（文京区）、2016年1月18日.
- ③ 加藤 弘二郎、A Textual Analysis of the Description of the “Four Types of Sentient Beings”、日本印度学仏教学会、於 高野山大学（和歌山県）、2015年9月19日～20日.
- ④ 加藤 弘二郎、
On the Tibetan manuscripts of the Samdhinirmocanasutra, 東アジア宗教文化国際学会、於 華東師範大学（上海）、2014年5月23日～25日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 弘二郎 (KATO, Kojiro)
東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・特任研究員

研究者番号：90597428

(2) 研究協力者

鈴木 洋平 (SUZUKI, Youhei)